

初任の小学校での失敗というと、枚挙にいとまがない。校内はもちろんのことだが、校外でも大きな失敗をしでかしている。

小教研石川支部での話である。小教研とは、小学校教育研究会のことである。初任の学校のときには、体育部会と特別活動部会に所属していた。免許が国語だということにもかかわらずである。国語から逃げていたとしか言いようがない。こんなことから、中学校に行くことになり、否応なく国語を勉強することになるのである。

教員3年目だった。小教研石川支部での体育の研究授業の授業者を務めたことがある。愚かだった。調子に乗っていたのかもしれない。バスケットボールの授業だった。自分なりに本を読んだりして勉強した。だが、結局はチャレンジではなく安全策の方を選んだ。失敗がこわかったのだと思う。失敗を恐れたことが、そもそも失敗だった。

参観した先生方は、チャレンジしたことには様々な角度から意見を言えるのだが、安全策とも言える授業をやられてしまうと、意見が言いづらくなる。あの頃の私は、そのことがわかっていなかった。自分のことしか考えていなかった。たくさんの先生方が集まる研究授業のねらいや意義をまるで理解していなかった。そもそも3年目の教員に研究授業をやらせるシステムそのものに問題があったとも言える。

その後、何度か経験の少ない先生の授業を参観する度に、自分の2年目の体育の授業を思い出すのである。苦い経験をである。

もっとひどい失敗は教員2年目だった。小教研石川支部の特別活動の研究授業があった。その事後研究協議会の司会を務めることになった。何を勘違いしていたのだろうか。そう簡単に司会などできるわけがない。特別活動のことを勉強して理解しておく必要がある。研究授業後の協議会のねらいや意義も分かっていたいなければならない。あの頃の私は、何も分かってはいなかった。知らないということは恐ろしい。無敵である。

小学1年生の特別活動の授業だった。授業者の自評から課題として2つのことが出された。私は当然の如く、この2つことから話し合いを始めた。今でも覚えている。一つは、授業が予定よりも早く終わってしまった場合にはどうすればいいかというものだった。この授業は、予定よりも15分以上早く終わってしまったのである。小学1年生ならばあり得ることである。

とはいえ、こんなことを聞く授業者も授業者だが、それをまともに取り上げて司会をする私は、参会の先生方からはどのように見えていたのだろうか。きっと「何でこんな若造に司会をやらせるんだ」「そんなことを話し合っても意味がないだろう」と思われていたはずである。

話し合うべき、もっと大事なことがあったはずである。それこそ特別活動に関わることである。今でも穴があいたら入りたいくらい恥ずかしい出来事である。だが、その後、研究協議会の司会者を何人も見てきたが、案外「この人は」という司会者には巡り会わない。そこで私の結論である。そのくらい司会をすることは難しいということなのである。

校内での失敗は痛い、校外での失敗は、さらにダメージが大きい。その証拠に、今でもずっと覚えているし、引きずっている。それでも、これだけは言える。失敗は人を成長させるのである。